

まちを舞台に芸術と文化を編む「ACKT」の紙面プログラム

OZINE

- エンジン -

ACKT

01

文教都市・くにおを編み直す

多様な学びが育まれてきたまち



まちを舞台に芸術と文化を編む「ACKT」の紙面プログラム

○ ZINE

- エンジン -



育まれてきた多様な学び

文教都市・くにたちを編み直す

「○ZINE」はまちに暮らし活動する人々のアクション(活動)を紙面の中で浮かび上がらせるプログラム。まちに住む人に情報を発信し、また収集することで、これまでになかった縁がつながり、これからの活動のきっかけをつくるエンジンとなるフリーペーパーです。今回の舞台は、文教都市として市内外に知られる国立市。古来から先人の知恵を継いできた谷保・青柳や、理想の学問を求め拓かれた国立駅周辺など、様々な教育が息づいています。不確実な時代に私たちは何を学び何を生むべきなのか。文教都市・くにたちが育む多様な学びを見つけに行きましょう。

- 04 谷保天満宮
- 06 NPO 法人くにたち農園の会
- 07 一橋大学
- 08 国立音楽大学附属幼稚園
- 10 社会福祉法人滝乃川学園／ロボットプログラミング教室 ProgLab
- 11 まちライブラリー くにたちダイヤ街／ベースクール
- 12 くにたち郷土文化館で学ぶ近代史 次の世代に生活を引き継ぐ
- 14 ACKT's ACTION ① 「・と-TENTO-」 Vol.01
- 15 ACKT's ACTION ② 「さえき洋品●」
- 16 エンジルーム こちら企画会議 ～○ZINEを載せてACKTはどこへ向かう!?～
- 18 堀道広 「たまたまプラブラ散歩」
- 19 国立高校 「私たち国高新聞部」
- 20 「CAST」 vol.2 坂根知里(スナック水中代表／ママ)
- 22 「LAND」 vol.2 500年のCOMMONを考えるプロジェクト 「YATO」

【ACKT (アクト) について】

ACKTはまちなかで生まれる多様なプログラムを通して、アーティストや市民・市外の参加者と交流をしながら活動し、ともに成長していくためのアートプロジェクトです。「まちを舞台に編まれる芸術と文化」をテーマにしたプログラムやアクションを通じて、新たなまちの価値を生み出していきます。

	【音楽】	【ファッション】	【食】	【展示】	【映画】	【公開制作】	【W.S.】
【農】							
【空き家・空きテナント】							
【歴史・学び】							
【子育て】							
【まちの回遊】							
【etc.】							

【活動について】

ACKTはひとつのプログラムだけを進めるのではなく、上記の図にあるような社会課題と、様々なアートの分野が交わる、[芸術と文化／スペースと人]の交差点をつくりだします。

【運営】

「国立市文化芸術推進基本計画」が目指す“文化と芸術が香るまちくにたち”の実現に向け、以下の団体が運営しています。

[主催] 東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、
国立市、公益財団法人くにたち文化・スポーツ振興財団、
一般社団法人ACKT

NOTE

谷保天満宮は谷保村が記述された起源に則り、「やほ」ではなく「やぼ」と読む。読み仮名からも、その歴史の長さが伝わってくる。

谷保天満宮の本殿。コロナ禍でも大きくは参拝客が減らず、今日も多くの人々の心を支えている！

谷保天満宮
東京都国立市谷保5209
TEL 042-576-5123

菅原道真が伝えた
知恵を求める姿勢
谷保天満宮

国立市を代表するスポットの谷保天満宮は、約1100年の歴史を持ち菅原道真が祀られる東日本最古の天満宮だ。道真は今日まで学問の神様とされており、江戸時代に寺小屋ができ学問が身近になった際に、勉学に励み右大臣にまで出世した姿に庶民が憧れ親しんだことが、きっかけといわれている。894年に遣唐使の中止を提言したことは、日本が大陸から知識を与えられるだけでなく主体的に思考し、文化を成熟させていくことにつながった。

現代、人生100年時代といわれ学び直しが注目されるなか、学問は学生や受験生だけのものではなくなった。学生にとどまらず社会人や高齢者も。そして知識の詰め込みではなく豊かに生きる知恵を。そうした本質的な学び生きた姿勢を、菅原道真の祀られる谷保天満宮は「文教都市・くにたち」に示そうとしている。



一橋大学ソーシャル・データサイエンス学部・研究科所属の教員の多くが研究室を持つ東キャンパスの東本館は、2022年3月の大規模改修を経て新たな顔をのぞかせる。

※建物内への立入はご遠慮ください。

昭和初期に、理想的な学園都市として開発された国立大学町。この中心に据えられた一橋大学(当時は東京商科大学)は、世界水準の商業教育を通じて日本の近代化を担い、国際的に活躍できる指導的人材を育成することを建学の原点とした学びの場である。現在は、商学部・経済学部・法学部・社会学部の4学部を設置。所属学部以外の開講科目を履修できる自由度と、伝統的な「ゼミナール」を核とする少数精鋭教育により、学生の論理的思考力と表現力を育み、グローバル社会に貢献できる人材を育成することを目指している。2023年4月には、一橋大学が得意とする社会科学の理論とデータサイエンスの技術を融合させて、課題抽出から社会実装までを担える人材を育成するソーシャル・データサイエンス学部及び研究科も設置される。

NOTE
東キャンパスにある国際教育交流センターでは、週3回、昼休みに留学生と日本人が交流するランゲージコミュニティが行われている。

一橋大学
東京都国立市中2-1
TEL 042-580-8000

郊外の学園都市で最先端の教育に触れる 一橋大学

国立市内では、富士見台第一団地の一角で商店街と連携してコミュニティ拠点運営するまちづくりサークル「ここたまや」、谷保のゲストハウス「ここたまや」を運営する学生団体「たまこまち」など、一橋大生が地域で自発的に活動する事例も多くある。国際交流を軸に活動する団体と連携し、異文化交流を深める留学生の姿も。コロナ禍を経て、地域に再び門が開かれた一橋大学。時代に真摯に向き合う一橋大生の姿から、私たちが学べることも多いはず。



「くにたちはたけんぼ」で行われる「どろまみれ」の日は、子供も大人も汚れることを気にせず泥んこになって、思いっきり楽しんでいる。

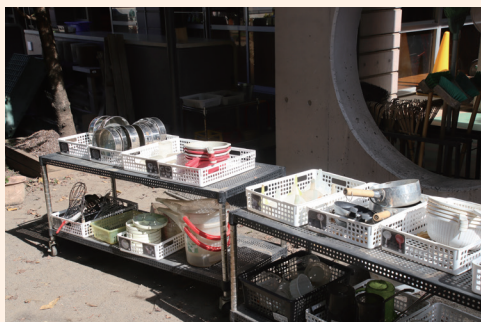
畑を起点に広がる学び
NPO法人くにたち農園の会

国立市の南部に広がる谷保地域を中心に、「田畑とつながる子育て支援」を事業指標の一つとして、農業と子育てに関連した多くの事業を展開する「NPO法人くにたち農園の会」。営農の継承が難しい谷保の農地活用を目的に、任意団体として始まった同会は、2013年に国立市の協力のもと、コミュニティ農園「くにたちはたけんぼ」を立ち上げた。代表の小野淳氏が子供を連れ立って営んでいたこの場所には、徐々に子育ての現役世代が集まるように。地域の中で子育てをサポートし合いながら、それぞれが主体となって必要な事業を生み出し、2016年にNPO法人を設立。同会が2020年から運営する認定子ども園「国立富士見台団地 風の子」もまた、設立にあたって保護者や保育士と話し合いを重ね、谷保の農や生き物を通して

NOTE
甲州街道沿いの古民家を活用した子育て拠点「つちのこや」や一橋大生と取り組むゲストハウス「ここたまや」など、事業の幅は広い。

NPO法人くにたち農園の会
東京都国立市谷保 5119(やぼろじ内)
TEL 042-505-7200

様々な体験ができる場として生まれ。
「農業は、動植物の生死を扱うと同時に、コントロールできない自然に触れる機会でもある。都市部にまだ残る農地を子育てや教育の場にする事で、たくましく生きる力」を次世代へ継承していきたい」と小野氏。1000年以上続く谷保の農地は今、0歳児から親世代までを巻き込んだ、多世代の学びであふれている。



NOTE
 子供自らが育つ力に信頼を寄せ、幼児期を存分に生きる時間や場を保障する幼稚園でありたいと願われている。

知覚を育む幼稚園の生活シーン

子供たちが遊びながら知覚や社会性を学べるよう、様々な工夫が園内にはされている。左上：リトミックの時間の様子／右上：メダカやカエルが息息する池／右下：子供たちがつくった泥だんご／左下：砂場の前には様々なツールが置かれており、表現手法が選ばれていく

国立音楽大学附属幼稚園
 東京都国立市中1-8-25
 TEL 042-572-3533

音楽と自然を通じて知覚のアンテナと表現力を育み、他者との共生を学んでいく。昨今、多様性や創造性の重要性は叫ばれつつも、概念ばかりが先行して具体的なアクションは見えにくい。そんななか、この幼稚園で日々積み重ねられる小さな実践は、強い説得力と次代への期待を抱かせてくれた。



**知覚のアンテナを育み、他者との共生を学ぶ
 国立音楽大学附属幼稚園**

国立音楽大学に附属する同幼稚園では、音楽の諸要素による身体・感性の育成——リトミック教育が行われている。子供たちは音の高低やリズムの緩急に合わせて全身を動かし、事物の強度・速度・様子を表現する。また園庭には各所に自然を楽しむ仕掛けがある。園児が木登りできるシンボルツリーに花壇と屋上農園、カエルやメダカが育つ小川と溜池。複数ある砂場の砂は場所によって配合が異なり、園児が自ら性質のちがいに気づき、検証し、泥遊びや泥だんごづくりといった用途によって使い分ける。これらに共通しているのは、「リトミック」を（音楽にとどまらない）感性の教育として拡張的に捉え、音楽と自然を通じて知覚し表現する術が育成されていることだ。

対話が重要視されていることも特筆すべき点だ。子供たちは主体者として遊びのルールを自分たちでつくり、議論しながら改善していく。例えば絵画表現では自分たちで色を調合して絵の具をつくり、ドッジボールでは自分たちでライ

社会福祉法人滝乃川学園

130年の歴史を持つ日本初の知的障害者のための社会福祉施設、滝乃川学園。児童・成人の入所に一時保護、ヘルパー派遣など多様な事業で障害者の支援を展開している。創設した石井亮一氏は聖書の「いと小さき者の一人に為したるなり」という教えを重んじ、時代とともに生まれた様々な知的障害者のニーズを汲み上げてきた。

緑が豊かな敷地は地域にも開かれていて。近隣住民らが野菜や草花を育てる「ガーデンプロ



園内にある石井亮一・筆子記念館。滝乃川学園を創設したふたりの資料展示が行われている（現在はコロナ禍の影響で休館中）。

ジェクト」に取り組み、保育園の園児は敷地内を流れる矢川の小径を散歩に使う。子供がカブトムシを捕りに来ることもある。学園をこの地に建てる際、石井氏は意図的に矢川を挟むかたちで敷地を購入し、園内に水や木々の自然を取り入れたという。小川が流れ木々があつながら、虫や草花、四季の豊かな世界が構築される。そうした自然環境と共生することが、入所者——そして関わる人々の暮らしもまた豊かにすることを、予見していたのかもしれない。

NOTE

1921~1931年、滝乃川学園の理事長を務めたのは、“日本資本主義の父” 渋沢栄一氏。思想に感銘を受け亡くなるまで経営面を支えた。

社会福祉法人滝乃川学園
東京都国立市矢川3-16-1
TEL 042-573-3950

小さな商店街にあるまちなちライブラリー くにたちダイヤ街

約50年前に、富士見台団地とともに生まれたダイヤ街商店街。その一角にある書店の2階に「まちなちライブラリー」がある。代表の林大樹氏は、一橋大学大学院社会学研究科教授を退任後、研究室にあった多くの書籍の行き先としてこの場所を始めた。

林氏は大学在任中の2001年から、商店会や国立市職員、他の教員らと連携し、富士見台第一団地「むっさ21商店街」の空き店舗活用と学生の学びの機会を掛け合わせ、地域の様々な課題と対峙する「人間環境キ



約1,500冊の蔵書には、林氏の社会学を中心とした書籍に加え、寄贈された様々な書籍が並んでいる。

NOTE

1階には富士見台地域唯一の本屋として親しまれる小鳥書房があり、本を通じたコミュニケーションが日々生まれている。

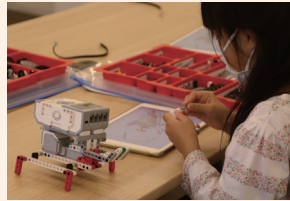
まちなちライブラリー くにたちダイヤ街
東京都国立市富士見台1-8-15小鳥書房2F

ステーション構想」を進めた。学生が主体となって企画・運営するカフェ、貸しホール、八百屋などは地域の新たな賑わいにつながり、2006年にNPO法人となったから現在まで、生きた学生の実践が生まれ続けている。まちなちライブラリーは、地域のみんなの本棚として親しまれる一方、興味を持った学生がお店番や企画を行うなど、私設まちなちづくり研究室のような場としても機能している。20年以上にわたる富士見台地域での実践は、今もゆるやかに続いている。

ロボットプログラミング教室 Proglab

Proglab(プログラボ)国立では、ロボットの組み立てと動きのプログラミングを幼稚園年中児童から中学生に教えている。授業のコースは難易度により複数に分かれており、ロボットの基本的な組み立てに始まり、プログラミングを通じて動作の取り入れ、チームでの共創やプレゼンテーションへと深まっていく。

授業ではわかりやすい動画やアニメーションのスライドが用意されている。日常の様々な物が歯車や機構などで動いていることを学び、それらを取り入れ



iPadのガイドを見ながらロボットを組み立てる生徒。基本系ができれば、そこから自由にアレンジしていく。

たロボットづくりを行う。過程では、講師が導きながらも教えることは極力控えられ、生徒の主体性が尊重される。ブロックのかたちや色の立体的な把握、組み立てやプログラミングを通じた物と物の関係性構築。仮設し、構築し、検証する……といったPDCAが50分(応用的なコースは90分)のなかで繰り返され、みるみる複雑なロボットが子供たちの意思でできあがっていく。授業に集中する後ろ姿に、VUCAの時代をたくましく切り開く頼もしさを感じた。

NOTE

教材に使われるのは教育用のLEGO。遊びの感覚で熱中する子供たちは、授業後も名残惜しそうにしていた。

プログラボ国立
東京都国立市北2-37-8
<https://www.proglab.education>

ひみつ基地で学ぶ探究の道 ベースクール

国立駅北口から徒歩5分ほど歩いた場所に、みんながシェアするひみつ基地がコンセプトの駄菓子屋、「くにきたベース」がある。そんなまちなちの駄菓子屋では週に数回、探究型学習塾「ベースクール」が開かれている。ここでは1週間に1コマ、全12回で1つのテーマに対しての探究を行う。10回の授業の中で、子供たち自身でテーマを見つけ、学習を進める。11回目が発表、12回目で振り返り、というのルーティンとなっている。授業の枠組みをまったく作ら



生徒の調べものの様子を見守る運営メンバーのウォーリー氏。

ないスタイルで開講する「ベースクール」。テーマも「お笑い」「マイニングクラフト」「昆虫」「きゅうり」など、クラスにより様々。大人が行うのは、子供たちが集まって話す場を提供すること。テーマや探究の仕方、指示を出すこともなければ、課題を軌道修正することもない。失敗も成功もすべての経験を学びに変えていく、というスタイルなのだ。この既存の枠に囚われない学びの場が子供たちをより自由な未来へ連れていくのかもしれない。

NOTE

くにきたベースは、ベースクール開講中もお店が開いている。取材の日には、お小遣いで駄菓子を買って帰る近所の子供たちの様子が見られた。

駄菓子屋 くにきたベース/ベースクール
東京都分寺市光町1-39-9
TEL 090-9134-0996



NOTE

保存活動をずっと行ってきた「くにたちの暮らしを記録する会」会長の佐伯安子氏。展覧会会期中には、トークイベントなどが開催された。

INFORMATION

くにたち郷土文化館
東京都国立市谷保6231
TEL 042-576-0211



国立の移り変わりと民具調査

左上：建設中の中央高速自動車道（1965年）／右上：エプロン姿で民具を調べる民具調査団（1983年）／左下：テープレコーダーで聞き取り調査を行う様子／右下：古民家で年中行事のひし餅つくりを伝える様子（2016年）写真提供：くにたち郷土文化館

南エリアの急激な都市開発が進むにつれ、暮らしや環境の変化に危機感を募らせる人も少なくなかった。1967年に文化財や史跡を保存する「国立の自然と文化を守る会」が結成。その後も国立第一小学校PTAによる民具収集、「くにたち野生植物調査会」の野草調査と市民による記録活動は続く。「国立市民具調査団（現くにたち暮らしを記録する会）」の調査活動が10年も続いたのは珍しい。最初は民具調査、そのあとは聞き取り調査になり、くにたち郷土文化館が開館した1994年以降は、伝承が活動内容のメインになっている。

これだけ長く活動が続いたのは、文化を残していく大切さがバトンとして受け継がれていったからだろう。メンバーの多くは結婚を機に国立市に移り住んだ主婦だったが、聞き取りを進めていくうちに郷土への愛着が深まり、まちの文化が大切にされた。

現在、富士見台団地が建替えの時期を迎え、北エリアでも中央線の高架化や旧国立駅舎が再築されるなど、まちの景色は変わり続けている。そのとき、谷保や青柳の人たちが記録して残してきた物、手法、そしてその精神から、私たちが学ぶものは多いのではないだろうか。

歴史を継いでいく

**くにたち郷土文化館で学ぶ近代史
次の世代に生活を引き継ぐ**

生活の知恵や道具はどのように引き継がれてきたのか。国立の近代の成り立ちを探るべく、くにたち郷土文化館で2022年11月23日まで開催された「歩いて集めて見て聞いて一消えゆく暮らしを記録せよ」展取材した。



③



①

谷保で見つかった暮らしの道具

谷保を中心に、収集調査で多くの民具が保存された。

- ① 叩いて麦の脱粒などを行うくり棒（唐竿・運枷）
- ② 馬に引かせて田畑を耕す長さ2.5mの大型のおんが
- ③ ハンドルを回すことで藪から糸を紡ぐざぐり

写真提供：くにたち郷土文化館



②

まちの発展を支えた南北の開発

国立市は国立駅や大学通りを中心とする北エリアと中央の富士見台エリア、谷保や青柳のある南エリアで構成され、それぞれ異なる歴史が蓄積している。近代に至るまで北エリアは雑木林で、人々が暮らした中心は南エリアだった。南エリアでは旧石器時代の遺跡や縄文時代の石棒が見つかっており、鎌倉時代後期には「谷保」という地名が定まっていた。北エリアが大きく変わったのは、1926年頃に箱根土地株式会社を中心に行われた学園都市構想の開発からだ。一橋大学や国立音楽大学が設置され国立駅が完成し、「国立」という地名ができた。「文教都市・くにたち」はこのときの北エリア発展によるものだ。

しかし、国立市全体としてのターニングポイントは1965年だ。農地の広がる南エリアで中央高速自動車道の建設が進み、また中央の富士見台団地が完成したことで、まちの風景は大きく変わった。農家が減ったというだけで人口は急増して5万人を超えた。昨今「国立市」と聞くと北エリアを浮かべる人は多いが、国立市の現代の活気の礎となったのは実は南エリアの発展だったのだ。



「谷保天満宮のお祭りには欠かせない存在だった」

「さえき洋品●」の周辺に住む方々にお話を伺いました。当時のさえき洋品店についてのリサーチを進めていくと谷保天満宮(以下、谷保)にも関わりがあったというわさを耳にしました。どうやら、谷保天の祭事の際には法被などの衣装をさえき洋品店が用意していたそうです。さえき洋品店から谷保天までは徒歩5分ほどの距離。それも谷保天の参道に続く一本道なので、さえき洋品店が健在だった当時は、神社や参拝客との交流も多かったのかもかもしれませんね。



屋外や廃屋、高架下や駐車場などの普段なら見逃してしまうようなまちの隙間にランドマークとなるテントを仮設し、プライベートでもなくオフィスでもない、そんなまちの縁側のような中間領域を出現させて、まちの人たちと交流しながらアクションをインストールしていくプログラム「・と-TENTO-」。プログラムのVol.01を2022年9月の7日間、国立市・大学通りの緑地帯にて実施しました。



ACKT'S ACTION 02

「さえき洋品●」

2022年11月、ACKTはJR南武線の谷保駅、南口から徒歩0分の場所にある築69年、2階建ての木造建築を新たな活動拠点とすることに決めました。

拠点の名前は「さえき洋品●」。ACKTの活動拠点でもあり、この拠点そのものが「遊○地」プログラムの一つとして機能していくという意味を込めています。読み方は「さえき洋品(てん)」。ACKTの拠点になる数年前まで商店だったこの建物の「さえき洋品店」という名前と、「遊○地」の丸を組み合わせて「さえき洋品●」としました。

69年前から谷保の地域を見守ってきたこの建物と周辺環境についてのリサーチをお届けします。



「さえき洋品●」の昔に触れる

看板からも想像できるように、元々は洋服などを扱う商店だったようですが、それ以前の興味深いお話も伺うことができました。なんと、洋品店を営む以前は鮮魚店だったのだといいます。鮮魚店のご主人が亡くなったあと、その奥さんがお店の場所を引き継ぎ、洋品店を始めたのではないかとのことでした。確かに一階の入り口付近の壁は洋品店には珍しく、タイル貼りがされています。このタイルは魚や水を扱う鮮魚店だった頃の名残なのかもしれません。

「さえき洋品●」が建設されたのは昭和28年。そんな昭和の中頃、国立市はどのような様子だったのでしょうか？

右の写真は昭和54年に谷保駅構内から撮影された写真です。左奥に写っているのが現「さえき洋品●」と思われる建物です。写真からは当時の暮らしぶりを窺うことができますね。人々の服装や工事中と思しき駅の様子など、一つの写真から読み取れるポイントがたくさん見つかります。この中に当時の「さえき洋品店」を利用していた方々も写っているかもしれません。そんな建物で、これからACKTの活動が幕を開けます。



写真提供：くにたち郷土文化館



「・と」に取材に来てくれたのは国立高校の新聞部。ここでの出会いがきっかけとなり、○ZINEで連載をしていただくことになりました。

「・と-TENTO」(以下「・と」)の開催地には、テントと国立市周辺を描いた大地図、看板、椅子とテーブルが設置されます。テントはこのプログラムのランドマークとしての意味を持ち、看板には通りかかった人に見ていただけるように、簡単に「・と」の趣旨が書かれています。興味を持ってくださった方にお話を伺い、国立市の気になる場所などについて、地図にコメントを貼ってもらおう、というのが大まかな活動の内容です。

ACKTの活動自体に興味を持って来場してくれた方、SNSで「・と」を知って遊びに来てくれた方、たまたま通りかかった方、1人だったり、家族連れだったり、様々な

方とお話することができました。みなさん、一度椅子に座ってお話を始めると、その話題はまちのことだけにとどまらず、多岐にわたりました。「今、こういう活動に興味があって...」「大学の卒業研究でこんなコトをして...」など、自分の興味関心のあることについての話が聞けたり、「・と」で知り合いとばったり出会って、そのままACKTのメンバーも混ざって討論会が始まったりと、多様な場へ変化していきました。時にはジャグリングを披露する人が現れたり、学生からのインタビューを受けると、少し変わったことも起こりました。「・と」開催中の緑地帯には様々な人が集まり、プライベートとパブリックな場が溶け合った、まさにまちの縁側のような空間が広がっていたのではないのでしょうか。

今回は7日間の実施で1日に10、20名、全日程通して98名の方が「・と」に立ち寄ってくださいました。

「・と」は今後もACKTのプログラムとして行っていく予定です。次回は、国立市のどんな場所に現れるのでしょうか。お楽しみに！

エンジンルーム こちら企画会議

～○ZINEを載せてACKTはどこへ向かう!?～

取材や編集を終え、制作メンバーで振り返り会議を実施。取材の経験は、どんなエンジンになり得るのか? どこへ向かう原動力になるのか!? ACKTの新たな拠点「さえき洋品」で議論します。



「東海道上藤栗毛」など魅力的な道中も、読み直してみたいです。ACKTでミッドナイト・ウオークとかどうですか(笑)。

K 自転車にすれば2泊3日ぐらいで東海道上は行けそうですね(笑)。
A 自転車ってお互い話せないから歩いたほうがいいかもですね。丸山さんはなにがしたいですか?
M 僕は、福祉。小金井に「ムジナの庭」という就労支援をしている施設があって、障害のある方が集まって物産などをやっているのが気になっています。あと、別の仕事で重度身体障害のお子さんがある方のプロジェクトをサポートする機会もあり、改めてちょっと福祉をリサーチしたいですね。
A 土方さんは次号でなにをとりあげたいですか?
H 例えば、まちなかの気になるものを記事にしてもよいかと思います。個人的には看板、看板って特徴的なものもあるし、いつの間にかなくなってしまうものもある。当時の流行りの字体を探ってみてもいいし、市内でいちばん古い看板を探してみてもよいか。それを市民の方々に巻き込んで探してもいいですね。

ACKTを動かかけるACKT
丸山(以下、M) まずは今号を振り返りましょう。「文教都市・国立を編み直す」というテーマはよかったですね。今回は比較的まじめにつくったけど、まだまだ面白くて余り感があると感じました。
田尾(以下、T) アートプロジェクトとして、問いや行動を投げかけるような工夫ができるかもしれないですね。
M 「ZINE(エンジン)」というフリーペーパーの名称には、まず「円陣」を組んで自分たちの場をみんなで広げていくという意味と、丸の中にいろんな活動が入ってきて、自分たち自身も学びながら共有していく、という意味。そして最後に、自分たちの活動も含め、きつかけや学びになる「エンジン」になってほしいという意味が込められています。
T 今回は紹介がメインになってますよね。エンジンに例えるなら、現在地は示されたので、この車が向かう目的地を今後は明確にしていきたい。
加藤(以下、K) 僕は、まずはフラットに捉えることって大切だなと学びがありました。「学び」とは何かを考え、さらに他の場所へも視点を向けたのは、面白かったなと思いました。ただ、紹介で終わるのではなく、それをどう捉えるのか、どう考えるのか、というヒントまで落とし込めるのがよかったのかも。

T 僕ね、ひとつの話があるんですけど、谷保天満宮の宮司さんに取材したときに、取材の趣旨を説明すると、谷保天満宮としてどういう学びを提供できるのか、
K この企画、土方さんの連載でいいと思います。誰が書いたかわからない媒体より、個人名の方が絶対です。よ、市民役所の方が連載してくれるとすくよくないですか?
H 記事に対して質問があればACKTに連絡がいくようにして、感想なども聞けるとういですがね。

どこにも属してない場所
A 活動しながら思ったのは、まさに興味がある人と話す機会はあるんですけど、興味ない人と話す機会がないんです。
M まちに興味のない人を連れてくるのって、けっこう難しいと思うんですけどね。興味がない人と話してみたいというけれど、特に話したくない話することがないといわれかねないとか……。
T 相手のことを認識することで、向かい合う自分がある存在なのかリアリになると思います。そういう意味で交わらないコミュニケーションをお互い認識できるのは、いいことだと思います。
M 少し話がそれますが、ACKTの拠点となるさえき洋品店って、駅前でも人も通るし、外から気になって見ちゃうじゃないですか。そういう意味ではこの場所って、す

なにかしら自分たちでやってみる、手を動かしてみる……というのは大事かもしれない。

ごく可能性があるところだとは思っていません。
A そうですすね。昨日掃除していたら、好意的に話しかけてくれる人もいれば、怪訝そうに見てくる人もいて、なぜか何回も通る人もいました。ここがまだどこにも属してない場所だからってこういうものあるからだと思います。
T そういう意味では、ここはアートプロジェクトっぽいすね。
A 例えばご飯屋さんの看板を出しちゃったら、半数以上の人が通りすぎるだけでしょうけど、何をしているかわからないと気になって覗き込んでしまうんですね。
M 「カフェです」って言い切るのではなく、「コーヒードーナツを売ってる場所です」といっておいて、そこでなぜか展示やアートプロジェクトをやっていると、ドーナツ買いに来た人が偶然に接点を持つ……ぐらいいがよさそうですね。
T 看板を設けないっていうのはいいですね。「ZINEも、特集テーマを設けない」という話につながりますが、キーキ特集となると、キーキに興味ある人しか読まなくなっちゃう。だからあえてテーマを設けない、あるいは姿勢でテーマをくくるとか、対象を決めるのではなく、こういう姿勢でリサーチします。だけを決めておくとか。
M どんなテーマにするにせよ、いちばん重要なのは、インプットができて活動につながることですすね。それがいいんなたちにも伝播して、どこかで

アップやアクションにつなげられると、もっとアートプロジェクトとしての価値づけができますね。
M 「ACKT(アクト)」っていう名前も、アクションにつなげていくっていう意味ですもんね。公民館などで行われている学びは比較的座学のものが多いと思うんですけど、僕らがやりたい学びは、それとはちがう学びです。
T 「ZINE」に置き換えると、毎号なにかしら自分たちでやってみる、手を動かしてみる……というのは大事かもしれないですね。問題提起して、リサーチや取材をして、最後は実際にやってみる。
M 自分たちがなぜこのテーマにしたのか、取材先の風景や自分たちが感じたことを紙面にきちんと記していく。編集チームが前面に出る、つくっている人を出すことも大事だと思います。

次号のテーマ

T 次号では何をテーマにしましょうね。
M このテーマが直接ACKTの活動につながるなくても国立市以外でも、よいと思います。
T 最近どんなことが気になってますか?僕は「道中モノ」です。ゴールやリターンをもちべえにくいアートプロジェクトを続けるモチベーションとはなにか。特に徒歩のようにじっくり取り組んでいくことについて、自分なりに考えたい。日本では「奥の細道」や「東海道五十三次」

活動が生まれていく。
T ACKTとしても、情報発信をしたいわけじゃなくて、むしろ情報を得たいってことですすね。
T 次号は春頃ですかね?……みなさん、花見は好きですか?僕は、桜の自分が主役だと疑ってない感じが少し苦手なんです。花が逆に花をばしよってみたい。
M 花見じゃなくてパーベキューですか。
T 花見じゃなくてパーベキュー!次号はみんなで「……じゃない方」を持ち寄るとかどうでしょう。
A そういいですね。
M ゆるいテーマでいいですね。
T みんなの「……じゃない方」をとりあげる。関心を持ってなかったり世の中でメインじゃないものに関心を与える。ゆるく感じるけど、福祉やまちに興味がない人の社会包摂(インクルージョン)にもつながってくる、大事なことだと思います。
H ACKTでやろうとしていること、つながっているような気がしますね。記事として「じゃない」を突き詰めていくのも面白そうですね。

いちばん重要なのは、インプットができて活動につながることですすね。

ACKTの代表理事、デザイナー、ライターとしての活動と並行して、国立市内で「Inuseum shop」の運営を行う。アトピークットを同時に愛する異業種児。

たまたま 散歩

矢川プラス 楽しみすぎる

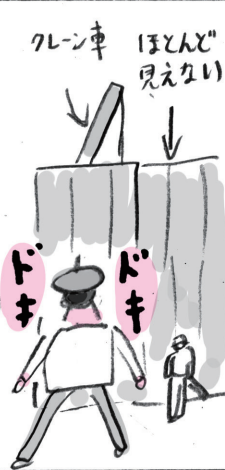


堀道広

2022年春



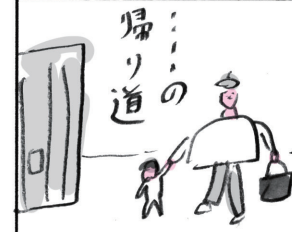
自分の住む地域(矢川)に新しい公共施設ができる



それはつまり町の発展につながる。

それだけで自分の子供が生まれるかのように胸踊り血流が良くなる気持ちだった。

子どもの保育園の送迎



わざと工事を見るのに遠まわりしたりした



2023年4月オープン予定

たのしみだ たのしみすぎるぜ 矢川プラス！



「矢川プラス」は、都営矢川北アパートの建て替えにより生じた公共用地(公有地)に、令和5年(2023)4月の開設をめぐって準備が進められている複合公共施設です。

堀道広 | 1975年富山県生まれ、国立市在住。うるし漫画家。うるしと漫画に特化した活動を続ける。「多摩全継ぎ部」部長 近著「うるしと漫画とワタシ〜その水平的な仕事〜」(駒草出版)等。

私たち

国高新聞部



01号

国立高校に通う新聞部の生徒が、自分たちの学生生活を紹介する連載。01号では、代表的な校風の「自由」について書いてもらった。

私たちは国立高校新聞部です。普段は、「国高」こと都立国立高校で新聞を月1回程度発行しています。今回よりこちらの「OZONE」にて記事を担当させていただきます。第1回は「挨拶として、私たちの通う国高について紹介します。国高は国立市の大学通りの中ほどに位置し、「全部やる、みんなでやる」を掲げています。特に2日間で1万人を動員する文化祭「国高祭」が知られています。国高の大きな特徴に、「自由」である点が挙げられます。例えば、校則がなく、また制服が指定されていないため、法に抵触しなければどんな格好でも通うことができます。国高生に行った「普段の登校時の服装」のアンケート(左下表)では私服の生徒が最も多い(60.4%)ですが、部活用の運動着(34.4%)や「なんちゃって制服」という、個人的に制服屋等で購入したものを着ている生徒(5.2%)など、かなり多様です。また、「ハロウィン」に学校で仮装(特別な格好やメイク等)をしたか」というアンケートで「した」と

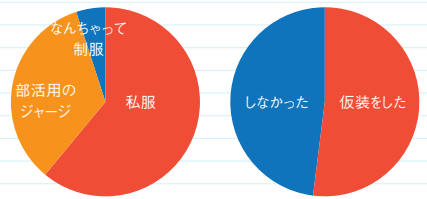
答えた生徒が、52.9%と半数を超えました。(左下表)「千と千尋の神隠し」のカオナシや、手づくりのチエーンソーを使った人気キャラクター、幼稚園児や全身タイツ、女装、高校で使用している教科書の表紙の再現など、バラエティー豊かな仮装をする生徒がみられました。

こうした服装を始めた「自由」の上で、学校生活が成り立っているからこそ、国高生は様々な行動に自主性や能動的な姿勢が求められ、生徒ごとの自立が促されています。「自由」につく責任を全うすることが、文教都市の一角を担う国高に求められることではないでしょうか。



【アンケート調査】

「普段登校するときにはどのような服装ですか?」「先日のハロウィンで仮装(特別な格好やメイク等)をしましたか?」という2つの質問をもとにGoogleフォームを作成し、そのリンクを国高の1、2、3年生の学年LINEグループに送るといったかたちで投票をしてもらいました。全生徒約960人中154人の回答を得られました。





あったからなんです。私にとってスナックは銭湯くらいの距離感の存在で、元気がないときに「気分転換に行こうかな」と思えるような場所というか…。会いたいときに行けばママに会える、顔を見て会話が出来る、そんなリアルな場として存在しているのがスナックの魅力だと思います。

私もそうですが、同年代くらいの方は周りの人を傷つけない、相手のプライベートゾーンに踏み込まないような距離感を保つ人が多いですね。相手に対して踏み込んでいくこと自体を怖いと感じている人も多い。「スナック水中」では、そういう普段の生活の中での人間関係に疲

——坂根さんからみて国立はどんなまちですか？

今の国立市はファミリーにとっては住みやすいまちだし、学生も多いけれど、私と同じ20代、30代前半のプレイヤーは少ないです。実際、自分の友人で事業を始めようとする人たちは洪

——坂根さんは現在、「スナック水中」のママだけでなく、国立市の富士見台地域を舞台としたワークショップ「クラブサパーブ・郊外のアフターワークを楽しもう」でメンターとしてプロジェクトに参加するなど、国立市内を中心として精力

れてしまった女性に癒されていただけるような活動をしていきたいと考えています。

——実際にはどんな活動があるのですか？

女性のお客様に来ていただくために、様々な活動の展開を考えています。裏水中という名前だけで、女性だけが入れるサロンのようなものだったりとか、コンテンツをオンライン上で出していきたいです。また、これはまだ企画段階なのですが、同じテーマや悩みを持っている20代の女性たちで、自分たちの気持ちやエッセイをまとめたZINEなどを制作する取り組みも検討中です。

谷などの都心にオフィスを構えていて、「ここでイベントやるよ！」「一緒にやろう！」というふうに、割とすぐに同年代の横のつながりができていく。そうやってお互いに切磋琢磨している人たちを見ると羨ましい部分があります。

国立市だと一緒にイベントを行いたいと思う方々は経験を積んだ30、40代のプレイヤーが多く、それはそれでいい経験になるのですが、活動する際に戻込みしてしまう部分もあるので、同年代のプレイヤーとして切磋琢磨していけるような、「もっといいものをつくらうよ」といっ合えるような仲間が増えてほしいと思っています。

※国立市が策定した「国立市富士見台地域重点まちづくり構想」に基づき展開している「市民まちづくりプロジェクト100」のリーディング企画として開催されたワークショッププロジェクト



的に活動を行なっています。スナックを中心に展開される坂根さんの活動は、新しいまちづくりのカタチとなるのかもしれない。

INFORMATION

スナック水中
東京都国立市富士見台1-17-12
エスアンドエスビル1F
TEL 042-505-7307

CAST

CASTでは、まちなかで新しい動きをつくる人やそこに参加する人を「CAST」と呼びます。この連載ではすでに活動を行うまちの先輩をピックアップし紹介していきます。第2回目は「スナック水中」の坂根千里さんです。



PROFILE

1998年生まれ。八王子とインドネシア育ち。一橋大学在学中スナックで働き、留学先のカンボジアで路上スナックを営む。卒業後、新卒でスナックの事業継承を行う。「老若男女がともに集まるこれからの社交場」を目指し、活動中。

VOL.02 | 坂根千里 (スナック水中代表 / ママ)

国立市、谷保駅から徒歩1分。路地に入った先にある「スナック水中」。そこで2022年4月から新米ママとしてお店に立つ坂根千里さんは、3月まで一橋大学の社会学部で都市政策を学んでいました。そんな坂根さんがスナックを継業した理由、スナックという夜のまちの社交場から見えてくるまちづくりについて伺いました。

——国立でスナックを始めた経緯を教えてください。

一橋大学に通っていた頃、谷保で「ここたまや」というゲストハウスを運営していました。スナックで働き始めたのは、ここたまやで知り合った地域の方に「スナック水中」の前身である「すなつく・せつこ」に連れてきていただいた際、ママから「一緒に働かない？」というお誘いを受けたのがきっかけです。そのなかで年齢とコロナ禍の影響もあり、先代ママが引退することになりました。そこで、「お店を継がないか」というお話をいただき、自分自身もスナックのママとして働くことに興味があったため、引き継ぐことを決めました。

——「スナック水中」は女性に届けたいお店だと伺いました。

そうですね。もともと私がスナックを継業しようと思ったのも、自分自身の元気がないときにお店のママや常連さんのコミュニティに救われた経験が

VOL. 02 | 500年のCOMMONを考えるプロジェクト「YATO」



をこの5年間で構築できたと思います。縁日はこういう関わり方をする、年末の餅つきはこう、初午の掃除はこう…、という感じでサイクルができたのは非常に大きかったですね。

——500年続くために必要なことはなんだと思いますか？

僕たちの活動の塩梅や面白みをわかってもらえる人に伝えていくことです。仕組みづくり云々ではなく、誰に伝えていくのが大切ではないかと思えます。築田寺の空間も、僕自身は様々なことを経験してきたので、なんとなくパブリックとプライベートの開き方の微調整ができるのですが、それがわかる人でないとバランスの調整は難しく、ガバツと閉じてしまったり、逆にピタツと閉じてしまったりする。そのアジャスターの塩梅がわかる人に伝えていかないと続いていくのは難しいと思います。あともうひとつは、築田寺ではお客さんにも掃除などを行ってもらうようにしているのですが、



INFORMATION

500年のcommonを考えるプロジェクト「YATO」
東京都町田市忠生 2-5-3 築田寺内

[[LAND]]

様々なまちを訪れ、気になる活動を行うスペースを紹介する「LAND」。2回目に訪れたのは、町田市忠生にある築田寺です。「500年のcommonを考えるプロジェクト「YATO」」のディレクターであり、築田寺の副住職、保育園の理事長、音楽家でもある齋藤絳さんにお話を伺いました。

「500年のcommonを考えるプロジェクト「YATO」」(以下、「YATO」)は、東京アートポイント計画の一環として町田市忠生で2017年から行われているプロジェクトです。舞台となる築田寺周辺では、およそ500年ごとに歴史的な変化が訪れてきたといえます。そんな地域で、これから先の500年に向けて、忠生地域に関係する人と人とのつながりのあり方＝「common」を模索するために「YATO」は立ち上がりました。その活動について教えてください。

——「YATO」の活動について教えてください。

年に1度の「YATOの縁日」、「YATOの年の瀬」というイベントがあり、そのほかに「やとつ子同盟」というアーティストや年長者が行うワークショップに子供たちが参加し、子供と大人が忠生の歴史や文化を学び、新しい遊びや学びの場をつくらせていく活動を行っています。

——場づくりで大切にしていることはありますか？

トーンを守ることです。例えば「YATOの縁日」のとき、影絵を見るために大勢の人が本堂に靴を脱いで入ってきます。人が多いので靴とか1足、2足なくしちゃうんですか？そういうリスクを考えると、ホスト側の人間は途端に管理しないといけないと思う。でもそうではなく、自分が楽しむために来ているんだから、不都合があったら自分で解決するという人の集まりにしたい。そのトーンを守らないと結局ただの

サービスになってしまいうんです。こちらがサービスという原理で動かなければ本堂自体が自分の場所という感覚になり、それぞれが「気をつけよう」と意識するようになる。そこには子供も大人も関係なく、みんなが意識できるように言い続けなくてはいけません。でもそのおかげで、子供たちが大人になってからも、築田寺という場所がその人にとって特別な場所になる。結果、お寺に何かあったときに「どうしようか」ということを一緒に考えてくれる。みんながトーンをつくっていく、守っていく場であることを伝えていくことが大切だと思います。

——この5年間の活動の中で見えてきたものはありますか？

入り口の設計ですね。関わってくれる人たちが向けたアプローチの仕方というが、シーズンごとのリズムが掴めてきました。年間で大体こういうリズムで動いていくとお寺との関わりが心地よく開けるな、というリズム

PROFILE

1980年生まれ、天秤座。165cm。56kg。専門は子どもが育ち暮らして死んで次に向かうための環境や文化を考えること。保育施設の運営、500年間続く祭りの創造、寺院の再興、映像番組などへの楽曲提供、そして雑貨と電子楽器を駆使したパフォーマンスなどを行っている。発表音源に「narrative songs」(CD,spotify etc.)、著書に「すべて、こども中心」。(カドカワ)などがある。チルドレンズミュージックバンドCOINNメンバー、全国私立保育連盟研究企画委員、和光高等学校非常勤講師、築田寺副住職。



メールニュース配信

ACKTの活動に関する最新情報などをメールニュースでお伝えしています。ご興味のある方はぜひ登録ください。



ご登録はこちら

www.ackt.jp

[編集長] 田尾圭一郎(田尾企画 編集室)

[デザイン・編集] 一般社団法人ACKT

[表紙イラスト] 堀道広

[執筆(P.19)] 国立高校新聞部

[発行] ACKT(アクト/アートセンタークニタチ)

令和5(2023)年3月発行

[主催] 東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、

国立市、公益財団法人くにたち文化・スポーツ振興財団、一般社団法人ACKT

*「ACKT(アクト/アートセンタークニタチ)」は東京アートポイント計画の一事業として運営しています。

【東京アートポイント計画について】

東京アートポイント計画は、社会に対して新たな価値観や創造的な活動を生み出すためのさまざまな「アートポイント」をつくるために、東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京が、地域社会を担うNPOとともに展開している事業です。実験的なアートプロジェクトをとおして、個人が豊かに生きていくための関係づくりや創造的な活動が生まれる仕組みづくりに取り組んでいます。

<https://www.artscouncil-tokyo.jp/>

